

# 「抵抗」と「自己解放」の民族民衆文化運動と「文化＝政治」

——京都・東九条における「ハンマダン」の意味世界——

福山市立大学 山口健一

## 1 本報告の課題

本報告は、京都市東九条にて活動を行う「ハンマダン」における、民族民衆文化運動の論理を考察する。1986年に結成されたハンマダンは、民族楽器の演奏やマダン劇などを行い、在日朝鮮人の民族文化を主体的に形成する団体であり、在日朝鮮人と日本人が参加している。本報告では特に、民衆文化運動の歴史的な経緯とハンマダンと他の活動との差異化に着目し、その文化運動がもつ日本社会に対する「抵抗」と、その社会に生きる人びとの「自己解放」の論理に考察する。そこからハンマダンが創造する文化には、政治・社会問題が不可分に結びつく点について考察したい。

## 2 研究の背景

今日、日本社会のいたるところで、「多文化共生」を冠した祭りや民族祭りが開催されている。ニューカマーを主題とした祭りが多くみられる一方で、琉球民族やアイヌ民族、在日朝鮮人を主題とした祭りも多い。しかしその一方で、多文化共生の祭りや民族祭りは、料理や芸能といった文化面への傾倒から、日本社会の不平等構造や人びとの行動の変革に寄与していないとの批判もある(竹沢 2009)。報告者が現在調査している「東九条マダン」(1993年-)は、多文化共生の祭りの代表的な事例の一つとして挙げられよう(片岡 2006)。その祭りは在日朝鮮人の民族文化芸能を主流としつつも、東九条地域のさまざまな活動の展示や出店がならび、在日朝鮮人と日本人、障がい者と健常者、子どもから老人までが参加している。またその祭りには、文化芸能面のみならず、在日朝鮮人の歴史や境遇、障がい者の境遇、差別や人権の問題等の展示や催し物といった社会・政治問題の側面もみられる。本報告で扱うハンマダンは、このような東九条マダンの源流に位置する団体であり、報告者はそこにみられる文化運動の論理が、多文化共生の祭りや民族祭りに対する上述の批判をのりこえる可能性があると考えている。

また、階級闘争を中心におく従来の「社会運動」から、エコロジーやフェミニズム、反人種差別運動や反戦平和運動などの「新しい社会運動」、そして新自由主義的な管理社会に対抗する「新しい文化＝政治運動」へという重層的で再帰的な推移が指摘されている(毛利 2003)。本報告で扱うハンマダンは、この視点からいえば、民族差別の是正や権利要求、民族性の承認といった在日朝鮮人による「新しい社会運動」の中に位置づくといえる。本報告では、そうしたハンマダンが、グローバル化や新自由主義的な管理社会への対抗とは異なる目的で、「文化＝政治」運動を内発的に形成する点についても考えてみたい。

## 3 分析視角・方法・データ

分析視角としてシンボリック相互行為論、とくに A.ストラウスの相互行為論・社会的世界論を採用する。また方法として、A.ストラウスらのグラウンデッド・セオリーを採用する。ただし、事例研究に適するように一部修正している。使用するデータは、ハンマダンメンバーへの半構造化されたインタビューと、ハンマダンのウェブサイト、民衆文化運動についての文書資料である。

### 【文献】

片岡千代子, 2006, 「京都『東九条マダン』の中心的担い手についての考察」『東アジア研究』第 45 号, 大阪経済法科大学アジア研究所, 3-24 頁。

毛利嘉孝, 2003, 『文化＝政治』月曜社。

竹沢泰子, 2009, 「序——多文化共生の現状と課題」『文化人類学』74 卷 1 号, 日本文化人類学会, 86-95 頁。